

平成27年度  
宇都宮短期大学附属高等学校入学試験問題

国 語

注 意

- 1 監督者の「始め」の合図があるまでは、開いてはいけません。
- 2 試験時間は、板書されている時間割のと通りの50分間です。
- 3 問題数は大きな問題が4問で、表紙を除いて10ページです。〔四〕は記述問題です。
- 4 解答用紙は2枚で、答え方はマークシート方式と記述式です。
- 5 監督者の指示にしたがって、試験開始前に受験番号と氏名をマークシート解答用紙のきめられた欄に書き、さらに受験番号をマーク欄にマークしなさい。
- 6 監督者の指示にしたがって、試験開始前に受験番号と氏名を記述用解答用紙のきめられた欄に書き、さらにバーコードシールをきめられた枠の中に貼りなさい。
- 7 答えは、それぞれの解答用紙に記載されている注意事項にしたがって、ていねいに記入しなさい。
- 8 試験中に質問があれば、手をあげて監督者に聞きなさい。
- 9 監督者の「やめ」の合図があったら、すぐやめて、鉛筆をおきなさい。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

1 動物同士のコミュニケーションでは、文法の整った言語はふつ

う必要がありません。敵が近づいてきたときは、大声で叫べば危険  
信号として十分ですし、果物の甘い香りを口の周りにブンブン漂わ  
せていれば「あっち」と指さすだけで群れは食物の存在を知ります。

目の前の状況と密着し、知覚に直接訴えて行動を呼びかける言語記  
号は、文法要素なしでもけっこう機能するものです。文法にもとづ  
く言語を使って「論理的」判断などを試みれば、かえって時間がか  
かり、適切な行動をとれない場合も多いでしょう。

2 高度な文法がどうしても必要になるのは、目前の現実的状況か  
ら離れた時空間での出来事を記述するときです。とくに、そういう  
時空間で多数の人物によっておこなわれる、複雑な相互行動を描写  
するときです。( a )、想像上の架空のストーリーや、架空  
ではないにしても目前の状況と直接関係のない条件付きの状況を記  
述するには、いろいろな文法要素によって前後関係や論理的な脈絡  
を指定してやる必要があるのです。

3 語順が決まっているのもこれと関係があります。現実から離れ  
た時空間での出来事については、聞き手が格や時制などを示す文法  
要素に頼って内容を解釈する度合いははるかに増大するのです。

4 こうして、一つの仮説を立てることができるでしょう。――「複  
雑な文法をそなえたヒトの言語はフィクションから生まれた」とい  
うことです。

5 おそらく、それは共同体の祖先に関する神話や、災厄や戦争や  
狩猟の記憶、聖なるもの **A**、霊的存在についての物語なども

含んでいたはずですが。ただ、ここで誤解してはならないのは、フィ  
クションのなかにはそういう **②** 壮大な神話だけでなく、もつと **①** 卑近な  
ゴシップ(うわさ話)のたぐいも多かったと考えられることです。

6 人類学者のダンバーは、言語はいわば「音声による毛づくろい」  
であり、類人猿同士が親近関係をむすぶための行為から発したと述  
べています。狩猟のためのオス同士の情報伝達ではなく、子育てを  
おこなうメス同士のゴシップから言語が生まれたというのです。

7 壮大な神話と卑近なゴシップとでは **B** の開きがあるよう  
ですが、よく考えるとそうでもありません。ギリシャ神話だの古代  
インドの神話だのにしても、登場人物が遠い神々である点をのぞけ  
ば、構造的には一種の込み入ったうわさ話とみなすこともできます。  
恋をしたり **②** 骨肉相食(注2)んだり、嫉妬(注1)・野心・権力欲が渦巻き **※**  
のかけひきが繰り広げられる神話の雛形(注3)は、類人猿の社会にも見ら  
れるものでしょう。

8 だがそれなら類人猿の原型言語にはなぜ文法が無いのか、とい  
う疑問が出てくるかもしれません。( b )、ここで強調した  
いのは、ある種の「連続性」なのです。つまり肝心なのは、類人猿  
の現実的・日常的・行動的なコミュニケーションから突如ヒトの壮  
大な神話が出現したのではない、ということですが。むしろ類人猿に  
も(潜在的にせよ)ゴシップや簡単なフィクションの **C** を語る  
能力はあったのではないか、そしてヒトの言語は、その能力を基盤

にして、フィクションの時空独立性・状況非依存性を大きく高めるために、高度な文法体系と豊かな語彙(注4)をそなえるに至ったのではないかと、ということなのです。

9 次に問われるのは、いったいなぜヒトは神話のような複雑なフィクションを作り上げたのか、その「動機」は何だったのかということ。――(c)それは、共同体としての結束を強め、構成員の不安を解消する、ということではなかったかと推測されま

す。

10 ゴシップや世間話をしながら仲良しグループを作り、何かあったら多数決できめればいい、というのは近代の民主主義社会に育った我々の考えがちなことです。しかし太古のヒトは、危険のみちあふれた過酷な自然のなかでリーダーを中心に身をよせあい、せっぱ詰まった状況で生きていたはず。――I「動物としては非力で虚弱な肉体をもった彼らは、大型肉食獣、飢餓、怪我(けが)、疫病などの災厄と隣り合わせの毎日を送っていたのです。ホモ・サピエンスの唯一の武器は「予測し計算する頭脳」でしたが、その能力は同時に「未知への不安」という副産物を生むことになりました。――II「たとえ数十〜百数十名程度の土俗的共同体でも、放っておけば不安は政治的に増幅され、疑心暗鬼がひろがり、共同体が無秩序状態となってしまうのは確実です。構成員の不安を解消し、秩序を与えるには、そこに「求心的なフィクション」がどうしても必要となると考えられます。――III「リーダーである首長は、そのフィクシ

ョンによって正統性を与えられるわけで、決して単なる肉体的・精神的な卓越性だけによって構成員に命令できる地位を得るのではありません。肉体的・精神的な卓越性だけが権力をもたらすグループは内部抗争が絶えず、――d「消滅していくからです。――IV」

12 土俗的共同体で世代をこえて受け継がれるフィクションは、個々の構成員の生をこえた一種の超越性を持ちます。それゆえ個々の構成員は、そのフィクションによって宇宙の秩序を得得し、自分の位置や役割を納得し、アイデンティティ(注5)と安心感を得ることができま

す。これこそが聖なる「神話」に他なりません。

13 「聖性」はヒトの宇宙に対する支配力の欠如から生まれたと言われています。ヒトは説明できない神秘の前で立ちすくみ、畏怖(いふ)の念に打たれます。神話は生と死の境界にまたがり、現在過去未来にわたる生のあり方を照らしだし、感じさせてくれる特別なフィクションなのです。

14 おそらく神話は、歌や踊りをとまなう儀式において繰り返し朗唱されたことでしょう。その言葉の響きのなかで、人々は陶酔し、不安を忘れ、情緒的一体感に酔いしれます。これこそ、言葉をもったヒトという動物の「毛づくろい」と言えるかもしれません。同じストーリーの繰り返しを通じて少しずつ言語の表現能力が向上し、神話の形成を通じてやがてヒト特有の〈心〉が形成されていったのではないかと推測されるわけです。

(西垣通「こころの情報学」から)

- (注1) 卑近ひきんな⇨手近てぢかな、身近ひぢかな  
 (注2) 骨肉相食あひはんだり⇨肉親にくぢん同士が争あったり  
 (注3) 雛形ひながた⇨見本、手本 (注4) 語彙ごい⇨単語の総体  
 (注5) アイデンティティ⇨他とはつきりと区別される、一人の人間  
 間の個性

問一 動物同士の……：……が必要ありません。とあるが、その理由として適当でないものはどれか。

- ア ヒトの言語は共同社会を形成するのに不可欠であったが、動物同士は、縄張りや食物の位置を伝えられる言語記号さえあれば生きていけたから  
 イ ヒトの言語のように文法にもとづいて具体的に出来事を情報伝達していたら、動物の場合はかえって適切な行動がとれないこともあったから  
 ウ ヒトは知覚に訴えかける以外の手段で他者とコミュニケーションを取る必要があったが、動物同士は直接知覚に訴えかける言語機能で十分事足りていたから  
 エ 動物は、ヒトのように目の前の現実的状況からかけ離れた出来事を記述したり、複雑な相互行動を描写したりするようなことがなかったから

問二 ( a ) から ( d ) に入る語の組み合わせと

- して適当なものとはどれか。  
 ア 「a やがて b すなわち c しかし d おそらく」  
 イ 「a すなわち b しかし c おそらく d やがて」  
 ウ 「a おそらく b やがて c すなわち d しかし」  
 エ 「a しかし b おそらく c やがて d すなわち」

問三 A から C に入る語の組み合わせとして適当なものはどれか。

- ア [A 萌芽ほうが] B 淵源えんげん C 雲泥うんでい  
 イ [A 淵源] B 萌芽 C 雲泥  
 ウ [A 雲泥] B 萌芽 C 淵源  
 エ [A 淵源] B 雲泥 C 萌芽

問四 ② 壮大な神話とあるが、ここでの「神話」の説明として適当なものはどれか。

- ア 卑近な語句だけでなく、「聖性」を持った言語が生み出されて使われる場合もある。  
 イ 知覚から得られた状況を語ったもので、特に文法的要素を必要としない。  
 ウ 儀式の中で繰り返し朗唱されることで共同体のなかに秩序を与えるが、共同体を混乱させる一面も併せ持つ。  
 エ 現実的状況から離れた出来事を語るもので、共同体においては世代をこえて受け継がれる。

問五

※には、「巧みに人をあざむくくわだて」という意味の

言葉が入る。適当なものを次から選べ。

- ア 暗中模索
- イ 権謀術数
- ウ 有為転変
- エ 当意即妙

問六

次の文章が入るところは、本文中の「Ⅰ」から「Ⅳ」のどこか。適当なものを後から選べ。

明日の計画をたてることは、明日襲いかかってくるかもしれない不安を抱え込むことでもあるからです。これが途方もないストレスを生むことは言うまでもありません。

- ア 「Ⅰ」
- イ 「Ⅱ」
- ウ 「Ⅲ」
- エ 「Ⅳ」

問七

③リーダーである……与えられるとあるが、その説明として最も適当なものとはどれか。

- ア 無秩序状態になってしまいがちな土俗的共同体において、「予測し計算する頭脳」に突出していることで、首長としての地位を獲得した。
- イ 精神的・肉体的な卓越性によって、土俗的共同体を取り巻く過酷な自然環境のなかで首長として構成員に受け入れられた。

ウ 「求心的なフィクション」によって、共同体の構成員に言葉では説明できない神秘や畏怖の念を感じさせることで、首長としての立場を揺るぎないものにした。

エ 「フィクション」をとおして状況依存性と「聖性」を取り戻したとき、首長としての正統性を確固たるものにした。

問八

本文を段落分けしたものとして適当なものとはどれか。

ア	「 1 ↳ 3 /	「 1 ↳ 2 /	「 1 ↳ 3 /	「 1 ↳ 4 /
イ	「 1 ↳ 2 /	「 1 ↳ 3 /	「 1 ↳ 4 /	「 1 ↳ 5 /
ウ	「 1 ↳ 2 /	「 1 ↳ 3 /	「 1 ↳ 4 /	「 1 ↳ 5 /
エ	「 1 ↳ 2 /	「 1 ↳ 3 /	「 1 ↳ 4 /	「 1 ↳ 5 /

問九

本文の中で述べられている内容と合うものはどれか。

- ア 安定した共同体の形成には、フィクションを語りうる高度な言語の獲得は欠かせないものであった。
- イ 卑近なゴシップから言語が生まれたという点において、ヒトと類人猿とは決定的な違いがある。
- ウ あらゆる情報伝達を容易にしたことから、言語は「聖性」を獲得した。
- エ ヒトは多様でせっぱ詰まった状況を具体的に把握する手段として、文法体系を作り上げた。

## 二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

都会から引越してきた「タケオ」に螢を見せてやろうと、中学二年生の「わたし」は、「タケオ」と「ヒデキ」、弟の「シゲル」とともに螢を捕りに出かけた。

長いトンネルのような竹林を抜けると、夜空が広々と現れた。シゲルはかたわらの一本の竹に近づいた。葉の上に滲むような光の玉が四つ五つ乗っていたからだ。歩み寄るとパツと竹の葉を両手で叩き、光をはたき落した。暗い地面にポロポロと光がこぼれ散る。それを拾い螢カゴに入れた。<sup>①</sup>まるで水玉かなにかを、すくい取るようである。けれど水でない証拠に、シゲルの小さな掌は螢の火にボウーと染まって、闇の中に輪郭が透けて見えた。火はこわれずに、ふと弱まり、また息を吸い込むようにジーと明るくなった。螢カゴをわたしに預けると、シゲルは竹林の蔭から月の下へ出て、そこらの新しい竹の葉を拾い、タケオ達のために虫カゴを作った。葉に小さな裂けめを入れて、順々に数枚の葉を差しこみ編むのである。<sup>②</sup>すぐ、掌に乗るくらいのも、小さな紙風船型の虫カゴが二個できた。シゲルの手は黒くて細長くて猿の手のようなのに、器用なのだった。「ここから入れてみて」シゲルが虫カゴのフタを、壊れないようにそっと開けてみせる。タケオはかぶっていた底のついた帽子をとり、宙に流れる火を一つパツとすくい取った。虫カゴにそれを移すとフタを

する。竹の葉の編目から小さな火が見えた。<sup>③</sup>わたし達は思わず顔を見合せて笑った。虫というより不思議な火を一つ生け捕ったような気がした。それからわたし達は螢捕りに夢中になった。ヒデキは帽子がないので、シゲルと一緒に竹の葉にとまる螢を探し、はたき落して捕る。わたしはタケオが帽子で闇をすくうのに一緒についてまわった。螢カゴのフタを開けて、タケオが螢を捕るのを待つ。カゴの中に二つ、三つ、と火の数が増えていった。カゴの隙間から螢の火の動くのが（ a ）洩れるようになった。あかりの濃くなつた分だけ、カゴがかすかに重くなった感じがする。

シゲル達は螢を追って、竹林のほうへ行ってしまった。タケオは帽子を振りながら、（ b ）池の端の岩場へ移って行く。池の周囲は螢が群れ飛んで、一面光の線が流れていた。わたしの目の前を一つの火が滑り、顔の前を滑空してフツと消えた。タケオの帽子を持った手が止まり、わたしを見る。「静かに。頭の上にとまってい」とささやく。「本当に頭に砂糖水かなにか、塗ってきたんじゃないか？」「どこにとまっているの？」「手を出さないで。髪飾りみたくにきれいだから」とタケオが言った。彼はわたしのほうをじっと見ている。螢の火を飾ったわたしは、きれいな娘に見えないだろうか。胸がドキドキした。どうだろうか。どうだろうか。タケオの顔つきがまじめになっていた。<sup>④</sup>「まだとまっているの？」「うん」彼は小さい声で答えた。そして目をわたしの髪へあてたまま、（ c ）見ていた。「女の子って、夜見るとなんだか気味悪い

な」蛍見物の人の群れから離れて、わたし達は明滅する火に囲まれていた。それらの火は、わたしが「消えろ」と心に思うと消え、「点いて」と思うと本当に点くような気がした。「Ⅰ」わたしは沢山の蛍を従えて、タケオの前に立っているのだった。「あたしがこわいの？」「そんな顔するなよ」「Ⅱ」わたしはなんだかくすぐつたくなった。おかしさをこらえて一歩タケオのほうへ近づいた。「ねえ。あたしの髪にとまった火、どんな色をしている？赤い色かしら、それとも黄色やろか、青やろか」「バカ、変なこと言うな」タケオはあどずさり、シゲル達のいる竹林のほうへ、急にわたしを置いて逃げ出した。わたしはますますおかしくなって、「ねえ、どんな色。言うてみて」と声をかけながら、タケオのあとを（ d ）追っかけた。蛍の火がそれに続いて走った。

帰り道、タケオはわたしから離れて歩いた。シゲルとヒデキはわたし達の前を、何も知らず行く。二人は自分達のその夜の収穫を、興奮してしゃべっていた。「Ⅲ」タケオは黙って歩いている。ときどき、私の顔を見た。そのたびにわたしはにっこりと笑ってみせた。⑤タケオは急いで目を逸らした。懐中電灯の灯を頼りに、竹林の闇を潜ってまたもときた小道を逆にたどる。息が苦しくなるほど、竹林の闇は深かった。わたしはうつむいてクツクツと笑いながら、林の中を歩いた。ようやく山道を抜け、やがて学校の近くまでもどってきた。そのあたりまでくると、道には街灯も点いて明るい。タケオはホッとしたように口をひらき、ヒデキ達としゃべるようになった。「もう女の子をつれてくるのはゴメンだ」彼は生きかえったよ

うに元気な声で言った。「Ⅳ」わたしはただもうおかしかった。タケオの背丈が学校で見るとより低く縮んで見えた。

学校の坂をくだりバス道路を渡ると、タケオの家に寄った。喉が渴いたので麦茶をもらって飲んだ。そのあと井戸水に冷やした西瓜を出された。タケオの母親はわたし達が西瓜を食べているあいだに、蛍カゴに水をすこしかけて、縁側の軒下に糸で吊るした。「タケオさん。明日、虫カゴを買ってくるのいいわね」と彼女は言った。竹の葉のカゴでは蛍の火がよく見えなかった。「十四以上は入っているだけだね」あぐらをかいて西瓜を食べながら、タケオはいばって母親に教えた。シゲルがつと立って、「すみません。お便所を貸してください」と言った。西瓜のせいである。やがてシゲルが便所からもどってくると、わたしも断って立ち上がった。便所は縁側から狭い庭をまわりこんだ裏にあった。たぶん借家だろうが、建物は古いけれどきちんと掃除されていた。母と子の質素だけれど、清らかな暮らしが見えるようだった。あたりを見ると、横の壁板に薬局の店名入りの日めくりがさがっていた。⑥曜日の下になにか文字が並んでいる。文字を読むと、——少年老い易く学成り難し——などと書いてある。勉強少年の家の便所にふさわしい気がして、わたしはすこし感心した。そのとき、顔の前を蛍の火が一つ滑った。帰路の竹林で服にとまったのを、ポケットに入れたのだ。スカートをまくりあげたとき出てきたのだろう。手をのびしかけたが、やめた。タケオにあげよう、とわたしは思った。⑦こわがりのタケオへ、蛍の火の一つ、わたしからのプレゼント……。蛍を閉じこめて便所を出ると、わた

しはそしらぬ顔で明るい座敷へもどって行った。

(村田喜代子「十二のトイレ」から)

(注) 赤い色…蛍の赤い火を見ると身内に良くない事が起こり、

青い火は死んだ人を乗せているという言い伝えがある

問三 ② すぐ、が直接かかる部分は、本文中の~~~~線アからエのどれ

か。

ア 乗るくらのい

イ 小さな

ウ 虫カゴが

エ できた

問一 ( a ) から ( d ) に入る語の組み合わせと

して適当なものほどれか。

ア 「a どんどん b ぼんやり c ゆっくり d まじまじと」

イ 「a ゆっくり b まじまじと c どんどん d ぼんやり」

ウ 「a ぼんやり b ゆっくり c まじまじと d どんどん」

エ 「a まじまじと b どんどん c ぼんやり d ゆっくり」

問四 ③ わたし達は……笑った。とあるが、その笑いの具体的な内

容として適当なものほどれか。

ア 宙に流れる火を捕らえたという満足感からくる笑い

イ 虫カゴから逃げようとする蛍の滑稽な動きに対する嘲笑

ウ 捕った蛍を家族に自慢できるといふ優越感からくる笑い

エ 捕った火が案外小さかったことへの苦笑

問二 ① まるで……ようである。とあるが、この表現から読み取れ

る「シゲル」の蛍の取り方の説明として適当なものほどれか。

ア 軽いものなので、やすやすと取っている。

イ こわれやすいものなので、慎重になっている。

ウ 美しいものなので、夢中で取っている。

エ 小さいものなので、目を凝らしている。

問五 ④ 「まだとまっているの？」とあるが、その時の「わたし」の気

持ちとして適当なものほどれか。

ア 蛍が長い時間自分の頭にとまっていることが不思議で、その理由を知りたい。

イ 蛍が本当に自分の頭にとまっているのかが分からずじれった

い。



ウ 「タケオ」の目に自分がどのように映っているのかを確かめた  
い。

エ 「タケオ」が自分に嘘うそをついていることは明らかであり、腹立  
たしい。

問六 次の一文が入るところは、本文中の「Ⅰ」から「Ⅳ」  
のどこか。適当なものを後から選べ。

月の光の下で彼の顔は青白く見えた。

ア 「Ⅰ」 イ 「Ⅱ」 ウ 「Ⅲ」 エ 「Ⅳ」

問七 ⑤ タケオは急いで目を逸らした。とあるが、その理由として適  
当なものほどれか。

ア 暗闇の中でもまったく動揺することのない「わたし」の態度  
に引け目を感じたから

イ 闇のこわさも理解できないような「わたし」の感受性の鈍さ  
に失望したから

ウ こわがりながらも気になって見てしまう「わたし」の笑いを  
余計に気味悪く感じたから

エ 「わたし」のせいで蛍を捕まえる時間がなくなってしまい、不  
満だったから

問八 ⑥ 少年老い易く学成り難しと同じ内容の言葉ほどれか。

ア 老いては子に従え

イ 三人寄れば文殊もんじゆの知恵

ウ 百聞は一見に如かず

エ 時に及んで当まさに勉励すべし

問九 ⑦ こわがりの……プレゼント……。とあるが、その時の「わ  
たし」の気持ちとして適当なものほどれか。

ア 自分がふざけたことで「タケオ」の気分を害してしまったこ  
とを謝ろう。

イ 勉強をして知識を増やすことも大切であるが、もっと精神的  
に強くなるのが大切であると教えてあげよう。

ウ 蛍が赤や青に光ることはないのだということをそれとなく知  
らせ、「タケオ」を安心させてあげよう。

エ 普段はまじめで勤勉な「タケオ」をもう一度驚かせてからか  
おう。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

孔子(注1)の、弟子どもを具(a)して、道をおはしましけるに、垣(オト出カケニナツタトキニ)より、、頭をさし出でてありけるを見て、「牛よ」とのたまひければ、弟子ども、あやしと思ひて、あるやうあらむと思ひて、道すがら、心を見むと思ひけるに、顔回(がんかい)といひける第一の弟子の、一里を行きて、心得たりけるやう、「日よみの午といへる文字の、頭さしだして、書きたるをば、牛といふ文字なれば、人の心見むとて、のたまふなりけり」と思ひて、問(ウカガクタクトコロ)ひ申しければ、「しか、さなり」とぞ、答へ給ひける。

(「俊頼髓脳」から)

(注1) 孔子(こうし) 中国春秋時代の思想家で儒教の祖

(注2) 日よみ 暦または十二支

問一

(a) 具して、心得たりけるの本文中での意味はそれぞれどれか。  
 (b) 具して

- ア 歩かせて  
 イ 護衛にして  
 ウ 連れて  
 エ 案内にして
- (2) (a) 理解した  
 (b) 心得たりける
- ア 得意になった  
 イ 説明した  
 エ 共感した

問二

に入る言葉として適当なものはどれか。  
 ア 牛  
 イ 馬  
 ウ 羊  
 エ 鳥

問三

あるやうあらむの解釈として適当なものはどれか。  
 ア 師が言うのならおそらく牛がいるのだろう  
 イ 師には何も言わないでいるのがよいだろう  
 ウ 師のことだから何かお考えがあるのだろう  
 エ たとえ師でも人間なら間違いはあるだろう

問四

のたまふの主語として適当なものはどれか。  
 ア 作者  
 イ 顔回  
 ウ 弟子ども  
 エ 孔子

問五

「しか、さなり」の説明として最も適当なものはどれか。  
 ア 「弟子ども」の知恵を試すために、「牛よ」と言ったのだということ  
 イ 一里先まで歩く間に、「顔回」なら謎を解くだろうと予想していたのだということ  
 ウ 「弟子ども」の忠誠心を確かめるために、あえて嘘をついてみたのだということ  
 エ 「弟子ども」の中で一番賢いのは、やはり「顔回」だったということ

## 四

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

人間の共通する普遍的な「生き方の知恵」とは何なのである  
うか。

端的にいうなら、経験に学べ、という不易の教訓である。むしろ、人間は教えられるまでもなく、いわば本能的に、経験によって学習してきた。人間とは学習する動物なのである。子供の遊びも、いたずらも、すべてこれ、経験を通じての学習といってよい。けれど、そうした学習は、ほとんどが無意識、無自覚のもとに行われるので、人はことさら経験というものの意味を問わない。したがって、経験を熟慮し、それを生かして、いかに多くの教訓をそこから汲みだすことができるか、ということに、なかなか思いをいたさないのだ。

別言すれば、だれでも経験の貴重さを心得ていながら、それを十分に活用する術を知らないのである。

なぜ、理由は明らかだ。人間は学習する動物であると同時に、忘却する動物だからである。**ア**元過ぎれば**イ**を忘れる」と、日本の諺にもあるように。

⑤ローマの史家リヴィウスも、言っている。「経験は愚者たちの教師だ」と。

(森本哲郎「世界への旅」から)

問一 端的、不易、熟慮の読みをひらがなで書きなさい。

問二 ① 普通の対義語になるように、次の□に適切な漢字一字を入れなさい。

特 □

問三 ② いかにが直接かかっている文節を、同じ一文から抜き出しなさい。

問四 ③ それが指し示している語句を、本文中から抜き出しなさい。

問五 ④ **ア**元過ぎれば**イ**を忘れる「の**ア**・**イ**に入る語句をそれぞれひらがなで書きなさい。

問六 ⑤ ローマの……教師だ」と。にみられる表現技法を漢字三字で答えなさい。

